

クリフォードDシマック『都市』のメモ

takaidos

都市(City)

クリフォードDシマック(Clifford Donald Simak)。
1952年発行。

林克己・他訳。
1976年。

序盤は「それで、それだけ？」という内容が、徐々に分かってくる。
人類の次への精神的進化が本書のテーマ。
SFに分類されているが、実態は叙情的・哲学的な童話。

大きなテーマ。

- ①殺戮を無くす。→人類からロボットと犬に引き継がれる。
- ②高度な知能・神経系統を持つ人類の都市への限界。

交通手段の拡大、農業革命による都市の消滅、格差の拡大。

↓
知能の高い、心を持ったロボットの出現。

↓
言葉を話す犬の開発。ミュータント人類の発生とジュウェイン哲学の利用。

↓
木星観測隊員、原生生物体験。

↓
木星観測帰還者による木星原生生物の魅力・優位性。
人類を木星に行かせようとするミュータント。

↓
わずかに残った人類とロボットと動物たちの世界。

↓
ほかの惑星への瞬間転送装置(ゲート)。
コブリーズの発見。

↓
ロボットによる人類、動物の指導。

↓
アリ塚建造と、植民惑星への動物たちの移住。
地球はアリ塚に呑み込まれて行く。

同調できない店の前。

- ①人間と犬とロボットとミュータント、それに木星原生生物。
人類のほとんどが木星に移住してしまった地球では、ロボットと犬をはじめとする動物たちと少数の人間だけということだが、猿は品種改良されていないのか？

②また人類は太陽系の惑星に移住できるほど高度な文明を持つようになるが、木星に究極の環境適応を見出すと地球を捨ててこぞって移住してしまう、という内容には反対。

またロボットは人類の残した人工知能だが、イーガンのように人間の意識・記憶を移植したものについては触れられていない。

③人間の身体を木星に原生生物に転位させるという点。

受精卵の状態から遺伝子操作なら現実的だが、成人した人間を転位させるというのは起こらない。

<目次>

刊行者の序文

第1話への覚え書

第1話都市

第2話への覚え書

第2話密集地

第3話への覚え書

第3話人口調査

第4話への覚え書

第4話逃亡者

第5話への覚え書

第5話パラダイス

第6話への覚え書

第6話道楽

第7話への覚え書

第7話イソップ

第8話への覚え書

第8話簡単な方法

解説/黄金時代のスター

<登場人物>

ウィリアム・グランブ・スティーブンス:都会に住む老人。ビル。1946年戦争から還る。1920~1999。★

ベティ・スティーブンス: グランプの娘。商業会議所の秘書。夫はジョニイ。
オール・ジョンソン: オンボロ車に乗る、グランプの友人。農夫。再教育を受けておらずまだ古い生活、農業を続けている。
マーサ・ジョンソン: オールの妻。
マーク: グランプの友人。田舎へ引っ越す。
ルウシンダ: マークの娘? 夫はハーブ?

F・Jアダムズ: グランプと戦争に行つて生還した戦友。原子力の仕事で財を成す。
ヘンリー・アダムズ: FJアダムズの孫。法律に詳しい。市の空き家を買占める。★

ジョンJウェブスター: 会議所秘書。都市は滅亡したと発言。反逆者と見なされる。商業会議所や公共団体から煙たがられている。ベティの夫ジョニイ。グランプの義理の息子。1951~2020。★

レヴィ・ルイス: 浮浪者。農地から追い出され狩猟で生計を立てている。

ジム・マクスウェル: 警察署長。警視総監。

ポール・カーター: 市長。

トマス・グリフィン: 市議会議員。犯罪者が逃げこむ空き家を焼くのに反対。

フォレスト・キング: 市議会議員。

テイラー: 人間順応事務局。職業紹介所の後継。

レイモンド・ブラウン: 市役所、市長の秘書。

ジョンJウェブスター: ウェブスター家初代当主。1951~2020。

チャールズFウェブスター: ウェブスター家2代目。1980~2060。

ジョンJウェブスター二世: ウェブスター家3代目。2004~2086。

ネルソンFウェブスター: ウェブスター家4代目当主。2034~2117。

ジェロームAウェブスター: ウェブスター家5代目当主。初代はジョンJウェブスター。医者★

ジュウェイン哲学を解き放った。広域恐怖症。

トマス・ウェブスター: ウェブスター家6代目。恒星間航行の原理を与えた。

メリー・ウェブスター: ジェロームの妻。トマスの母親。故人。

ジェロームの母親: トマスの母親?

ジェンキンス: ウェブスター家のロボット。

ジュウェイン: 火星。ジェロームが火星に行つて以来の友人。老哲学者。解明すれば人類を10万年は進歩させられるという学説を発表しようとしていた。

クレイボーン: 火星在住の脳医学者。

ヘンダースン:国際委員会総長。

ナサニエル:ウェブスター家の犬。言葉を喋る。飼い主はブルース。
ブルース・ウェブスター:ウェブスター家7代目。人間と犬の双生児を作った。外観は犬でも人間のように喋れる。祖父が火星人哲学者ジュウェインを救えなかったことを気にかけている。

リチャード・グラント:人口調査員。計数員。突然変異を追っている。

アレン・ウェブスター:トマスのもう一人の息子。アルファ・ケンタウリに向かうが失敗。

ジョー:山男。ミュータント(突然変異)。外見は年を取っていないが163歳。木こり。機械いじりが得意。知能が高く人の考えも読める(テレパシー)。旧人類をあざ笑う？

デイヴ・バクスター:老人。

ローパー:木星の原生生物。人類はこのローパーに転位して木星に降下を試みていた。四つ脚で巨大な頭と、数千年の寿命をもつ。

loper=ゆっくり歩く人。尺取り虫。

ハロルド・アレン:ローパーに転位して木星に降下。還らず。5人目の犠牲者。

ケント・ファウラー:木星観測第三支隊長。木星上のドームを基地にする。

タウザー:ファウラーの飼い犬。

ミス・スタンリー:体質転位技術者。

タイラー・ウェブスター:ウェブスター家の第X代当主。世界委員会(ジュネーブ)の議長。

バーリー・スティーヴン・アンドリュース:インタープラネタリー・ニュース社の編集長。

ジョン・カルヴァー:世界安全保障委員長。太陽系連邦内における殺人犯罪が終焉した125回目の記念日と報告。

エルマー:ウェブスター家の犬。木星原生生物から人間に戻ったファウラーを監視する。

エベンザー:改良犬。

シャドウ:ロボット。

ジョン・ウェブスター:ジュネーブ在住。60歳。

ミス・サラ:ジョンの元妻。ふたりの間にはトムという息子もいる。

オスカー:ウェブスター家のロボット執事。

ランドール:建物を建てる。

バレントリー:飲み物をつくる。

リューパス:狼。

ブリューイン:熊。
ジョシュア:犬。
イカボッド:ロボット。
ファットソー:栗ネズミ。

アーチャー:アライグマ。
リューファス:アーチャー付きのロボット。
ホームー:犬。アリののようなものを追う。
アンドリュー:人類がほぼ木星に行ってしまったあとに製造された
ロボット。

<あらすじ>

「このたびこの物語を出版するにあたって、人間というものがかつて存在したかどうか、都市の謎や戦争に関する憶説や、、、」
「人間と犬とはたがいに協力する二つの動物として発生し文化の発達に寄与しあいやがてある時期にたもとを分かつようになったと信じているものもおります」
～人間の実在したこと自体が神話的なほど未来、の話。

第1話への覚え書。

古代研究者バウンスとローヴァー。

「経済学や社会学の権威者たちは、大部分、都市というような組織が経済学の見地からだけでなく、社会的ないし心理学的に見ても到底成り立つはずがないと考えている。

つまり文化を発展させるに必要な、高度の神経系統をそなえた生物ならば、このような狭い地域の中に生存することは不可能であろうと彼等は指摘しているのだ。

そうして、もしそのようなことが試みられたとしても、やがては大量の神経症患者を出して、かような都市を作り上げた当の文化を、自らの手で破壊するくらいがおちだろろうともいっている。」

犬タイジ

「人間と犬は原始時代に共存していた」

第1話。

ロボット芝刈機が来ても、どかない老人グランプ。

家庭用飛行機(原子力エンジン)やヘリコプターが行き渡り、自動車は使われなくなり道路は荒れ放題になっていた。

友人のマークの一家は都会を離れて田舎へ引っ越すと知らせに来る

。現在は1990年(注:この小説が書かれたのが1952年)。

水耕法(水槽栽培)の増大で土地の耕作も事実上不要となり、農地が経済的な一単位とならなくなり、地価は下落し、都会とは比較にな

らぬ安い価格で広い土地を所有できる農村へ、都会の人間は移り住んで行った。

家族制度にも変革が起きた。

家も安価になって買い換えがしやすくなった。

都市の人口は激減したが税制はそのままで重く、商社でさえも都市から逃げ出しかねない状況に陥っていた。

市議会。

市は市民が新しい職業に順応できるように指導もしていた。

しかし農地を追い出されたり(レヴィ)、相変わらず古い農法で生計を立てようと頑張っているもの(ジョンソン)もいた。

そんな中、空き家に犯罪者が巣食うので警察署長、市長たちは空き家を焼き払おうとする。

ウェブスターは市長に抗議するが、旧軍人のグランブは大砲を持ち出して攻撃を開始する。

そこへグランブと資産家にヘンリー・アダムスが来て、空き家や公園などを買い占めたと宣言する。市長もお役御免となる。

ジョン・ウェブスターはグランブの娘婿。

ジョンソンは観光農場を始める、という。

第2話覚え書。

タイジ「ロボットは人間の発明品」他の神話研究家は反駁。

第2話。

医者でウェブスター一家5代目当主ジェロームは父親ネルソンの葬儀を終える。

家族は母親と息子のトマスだけになる。

トマスは近々火星に向けて旅立つことになっていた。

テレビ会議システムで火星の友人ジュウェインと話をする。

その後トマスは火星に行ってしまう。

ジェロームは広い場所が苦手な広場恐怖症(アゴラフォビア)だった。

火星在住の脳医学者？クレイボーンから電話があり、世紀の大発見を前にするジュウェインが倒れたので火星まで手術をしに来てくれと依頼がある。

しかしジェンキンスは迎えを追い返してしまう。

第3話覚え書。

言葉を話す犬と人間との関わり。

第3話。

計数員のグラントに犬のナサニエルが話しかけて、自分の飼い主ブルース・ウェブスターに合わせる。
ウェブスター家でブルースが犬を喋れるようにした話、遺伝的にそれが引き継がれることを聞く。
老トマスとも会う。
トマスはむかし恒星間宇宙船の設計をしていた時に山男と呼ばれる人間が現れ設計図の欠点を指摘して行ったという。

ウェブスター家に泊めてもらおうと夜ナサニエルが現れる。
原子銃が壊れているのに気づく。
山男ジョーが現れて直してくれる。
あとを追って行くとデイヴ老人と会いジョーの話が聞けた。
山の上にアリの家を作り、アリたちは車を引くようになったという

。ジョーを見つけ出し、ジュウエインの未完成哲学を読ませるもジョーは俺なら利用できる(←完成ではなく)という。
グラントはジュウエインの哲学書でもジョーを解放できないとわかり、修理してもらった原子銃で山男を殺そうとするが逆に殴り倒されて、ナサニエルに起こされる。
グラントは山へ向かう。

第4話覚え書。
木星が舞台。

第4話。
木星観測隊のケント・ファウラーは五人の隊員を原生生物ローパーに転位させて木星上に降下させたがいずれも帰還しなかった。
ファウラーは飼い犬タウザーを連れて木星に降下する。
すると頭脳が解放されて、タウザーとも心で会話できるようになった。
二人は木星観測基地に戻らないことにする。

第5話覚え書。
人類は百万年以前、洞窟から出て来た。そして殺人が無くなったのはこの百年ほどだった。

第5話。
5年後。
木星原生生物となったファウラーは同じく転位したタウザーに一旦別れを告げてドームに戻り人間に戻る。

記者会見。
金星植民地の紛争は収拾、冥王星上での生体実験も順調、アルファ・ケンタウリへの恒星間飛行計画も計画通り行われていた。
世界委員会議長タイラー・ウェブスターにインタープラネタリー

・ニュース社の編集長バーリー・スティーヴン・アンドリューズが木星観測隊員の帰還について質問するがタイラーは何もない、と答える。
タイラーはミュータントのジョーがウェブスター家を訪ねて来たという報告を受ける。
ミュータントと人間は冷戦状態で、品種改良して知能を持った犬たちがミュータントを看視していた。
ミュータントはすでにジュウェイン哲学を我が物にして数世紀が経っていた。
ファウラーはウェブスター家で監視されていた。
タイラーはファウラーが木星原生生物になった体験を公開すると人類がローパーに転位してしまうことを恐れていたのだ。
ファウラーはどきかへ去って行く。
訪ねて来たジョーとテレバイザーで話をする。
タイラーはジョーたちミュータントがグラントからジュウェイン哲学を盗んだと非難するが、ジョーは人間に必要なのは互いに同意することではなく、言葉の内包する意味を知り立場の違いを理解することだ、という。
ジョーは進化するために？人類はミュータントを必要としていると行って去る。
タイラーは子供用に買った万華鏡を覗くと急に頭がくらくらする。
外のネオンを見てタイラーはジョーたちミュータントがすでに何か仕掛けをしていることに気付く。
おそらくミュータントは人類を木星に行かせようとしていると考える。
ファウラーがふたたび戻って来たので拳銃で撃ち殺そうと考えるが思い留まる。

第6章覚え書。

第6章。

北アメリカ。

ウェブスター一家にはロボットのジェンキンスとロボットたちと犬たちだけが残っていた。

改良犬エベンザーとロボットのシャドウの、ふたりの会話。

人類のほとんどは木星に行ってしまった未来。

人類は塔の中にいるミュータントとジュネーブの小植民地にだけ残っていた。

ジェンキンスはあれから2千年ここにいた。

ジュネーブでかつての妻ミス・サラがジョン・ウェブスターに別れを告げに来る。

ふたりの間にはトムという息子もあったが、トムはもう独り立ちで

きていた。
サラは2百年ほど人口冬眠するという。

ジョンは北アメリカのウェブスター一家に帰る。
ジェンキンスやエベンザーと話す。
ジェンキンスはここは犬と放浪ロボットとミュータントだらけで、
犬たちがミュータントを看視しているという。
エベンザーはジョンの膝の上に乗ってこ機嫌になる。
日常ではコブリーズを聴いているという。
その謎の生き物から得た能力でエベンザーはジョンのこぶを治して
しまった。

ジェンキンスはジョンにふたたび犬たちを指導することを望むがジ
ジョンにはその気は無かった。
ジョンは防衛施設を稼働させ、防衛施設をコントロールする部屋の
位置を示す地図を焼き、都市ジュネーブを閉じて自分もサラが眠る
寺院に行って、管理ロボットに「永久に」と指示する。

第7章への覚え書。

第7章。
ジェンキンスが誕生して7千年。
周囲はすっかり動物たちの世の中になっていた。
ジェンキンスは動物たちから新しいボディをプレゼントされる。
感知能力に長けてテレパシーも可能な、丈夫なボディだった。
狼リューパスと熊のブリューインが給食係のウェブスターについて
話す。
ピーター・ウェブスター。人間はウェブスターと呼ばれていた。
彼らはジェンキンス7千年の誕生日を開催する。
ピーターは弓を作り、栗ネズミのファットソーに言われてコマドリ
を射つが、コマドリは死んでしまう。

ファットソーはジェンキンスにコマドリ殺害の事を知らせる。
ジェンキンスはミュータントたちに会いに行く。
しかしミュータントの城は別の惑星への瞬間転送装置に改造されて
いた。
憎悪にまみれたピーターと会う。
ピーターは何者かが狼のリューパスを殺してしまったが弓が折れ逃
してしまったという。
ジェンキンスはコブリーズだと言った。
ジェンキンスは人間がかつての弓矢から始まる武器の時代に戻らな
いように腐心する。
子供たちにテレパシーで自分の心に触れさせる。
一見なにも変わっていないようだったが、周囲の植物は成長して
いた。

ジェンキンはピーターといっしょにピクニックに行く子供たち種子を持たせる。

第8章への覚え書

巨大で成長し続けるアリ塚。

第8章。

ジェンキンスが誕生して12000年。

ジョン・ウェブスターが人口冬眠を開始して1万年。

アリたちは巨大なアリ塚、ビルディングを建造していた。

このまま行けば地球はアリ塚に呑み込まれてしまう。

アリたちは小型のロボットを使って、人間や犬が作ったロボットもコントロールしてアリ塚建造に従事させることができた。

アライグマ・アーチーのロボット・リューファスもアリのロボットに動かされてアリ塚へ行ってしまう。

犬たちは機械は分かっても化学は理解できなかった。

ジェンキンスはコブリーズの世界に誘われて旅をして久しぶりにウェブスター家に帰って来る。

動物たちやロボットたちがアリに困っていることを知り、ジュネーブで眠っているジョン・ウェブスターを起こしてアリへの対処方法を訊く。

ジョンは甘い物で誘き寄せて毒物で殺す、と答えて、また眠りにつく。

ジェンキンスは5千年間禁止されて絶えて久しい殺戮を甦らせることを躊躇しアリ塚建造を放置することにする。

犬たちは殺戮禁止を守り、蚤さえ殺せないのだった。

<メモ>

「経済学や社会学の権威者たちは、大部分、都市というような組織が、経済学の見地からだけでなく、社会学および心理学的に見ても、とうてい成り立つはずがないと考えている。つまり、文化を発展させるに必要な、高度の神経系統を具えた生物ならば、このような狭い地域の中に生存することは不可能であろうと彼らは指摘しているのだ」

「この話の中で、彼ら（人間）に賦与されている文明はあまりに高度であるのに、彼ら（人間）の能力はあまりに貧しい」

「人間なるものが、他の人間の考えや観点を、理解し評価する能力

にいかにかけていたのか。これこそが彼らにとってもっとも大きな障碍だったのであり、機械文明の可能とするあらゆる力をもってしても、ついに克服できなかったものなのである」

「要するに人間は、自らの欲するものがどこにあるかを知らなかったのである」

ミュータントのジョー。

「本質的には、きみら人類は非常に孤独な存在の集まりだ。人間は同胞である他の人間について決して充分に知ることがない。人間が人間を知ることができないのは、人間のあいだに、それを可能にする共通の意志の伝達手段がないからだ。

もちろん人類は友情になるものを持っている。

しかし友情は純粋な情緒の上に成り立つものであって、真の理解を基礎としていない。

人間はもちろん共同体を構成する。

しかしそれは忍耐によるものであって、理解によってではない。

さまざまな問題は同意によって処理される。

けれども、その同意は、たんに、人間のあいだの強力な精神が、弱体の精神のはんたいを打ちまかし抑制してしまうことによってのみ得られる同意なのだ。」

「われわれミュータントはテレパシーを持っている。しかしそれとこれはちがうのだ。

ジュウェイン哲学は他の人間存在の観点をかんじとる能力を培うのだ。かといって、それは必ずしも他人の観点到こちらが同意することを必要とはしない。

しかしその立場の違いを認識するのだ。

」

「そのことばの真の意味は、他人の言っていることの、内在する意味ばかりでなく、内包する意味をも理解ということなのだ。」

ロボットのジェンキンス。

「犬たちは誇りを失ってはならない。」

～高度な知能を持った犬たちに、かつては人間のペットであったことを話していない。